第2部　防災とコミュニティ

第4章　田老におけるコミュニティのつながり
～復興過程における被災者のつながりの諸相
女性の自主サークルを事例に～

佐藤悦子、南　正昭、添田文子

はじめに

東日本大震災によって、被災者たちは多くのものを失った。それは、これまで慣れ親しんだ町並みや住み慣れた住家、築き上げてきた財産、大切な人たちなど目に見えるあらゆるものである。しかし、震災によって一変してしまったものは、町並みやモノなど目に見えるものだけではない。これまでの人々のつながりなど目に見えないものにも大きな変化を与えた。住家を失った人と失わなかった人との間には軋轢があるし、「震災後、これまで親しかった友人・知人から心無いことを言われた」というような語りは被災地の調査でよく耳にした。こうしたことから、震災直後から、被災地の復興にはコミュニティの再建が必要であるといわれてきた。また、被災者の生活再建が急速に進む一方で、被災地において新たなコミュニティをいかに形成するのかということは重要な課題となっている。例えば、宮古市社会福祉協議会では、平成26年度の復興支援の柱を「地域コミュニティ支援」へと移行し、生活支援員の廃止と地域コーディネーターの増員を行っている。

一方で、これまでの復興過程において被災者は人と人とのつながりを再構築し、さまざまな実践を行ってきた。宮古市においても震災直後の避難所における共同生活集団、仮設自治会、今後のまちづくりや自主防災組織などについて住民が議論する検討会、ＮＰＯ団体、自主サークルなどが形成されてきた。本稿では、「支援」による住民の組織化に着目し、女性たちの自主サークルを巡る関係性や実践について述べる。

1　震災による住民組織

まずは、田老地区において震災後に結成された住民組織を概観する。田老地区では東日本大震災をきっかけとして24の住民組織が立ち上がった（表1）。商業関連の組織が1組織、宮古市主催の検討会が1組織、仮設自治会が2組織、コミュニティづくりや地域活性化などに関連する市民グループが8組織、趣味や健康維持などの自主サークルが11組織である。こうした組織は、復興過程が進むにつれて再編や変容、消滅を繰り返している。例えば、宮古市主催のまちづくり検討会は、コンサルタント会社の支援を得て住民主体の復興まちづくり協議会へと再編された。また、「ハンモックの会」の一部のメンバーによって「あみの会」は結成され、他のメンバーが加わった。その後、「あみの会」は一部のメンバーが脱退し、「ひよこの会」となった。

【仮設商店街：たろちゃんハウス協同組合】

宮古市と宮古市商工会議所から店舗再開の打診があり、中小企業基盤整備機構に仮設共同店舗の設置を申請した。２０１１年5月にテント営業を開始し、8月に「たろちゃんハウス協同組合」を設立、9月には仮設商店街の営業を開始した。

【仮設自治会】

表2は、田老地区に建設された仮設団地の一覧である。田老地区における仮設自治会は2か所で立ち上がった。宮古市社会福祉協議会（以下、社協）は各仮設団地において住民活動が活発化するように仮設自治会の結成を働きかけた。平成23年7月以降、仮設住宅の入居に伴う説明会において、仮設自治会を立ち上げることでのメリットなどを説明してまわった。当時の状況について担当者は次のように語る。

表１　田老地区における震災後の住民組織

No	グループ名	主体者	活動開始日	活動場所	種類	活動内容
1	たろちゃんハウス協同組合	住民	2011年8月	事務所：たろちゃんハウス	商業	仮設共同店舗の管理運営
2	田老防浪（ぼうろう）堤夢灯り実行委／田老夢あかりを灯す実行委員会	住民	2011年～2014年	仮設団地→民家など	コミュニティ	田老夢あかりを灯す活動
3	NPO立ち上がるぞ！宮古市田老	住民	2011年11月	事務所：被災地区	コミュニティ	復興まちづくり、防災教育、地域活性化などの支援
4	ハンモックの会	支援者／住民	2012年1月	仮設集会所など	趣味	ハンモック製作
5	ゆいとりの会	住民	2011年	避難所→仮設集会所→たろちゃんハウス	趣味	小物・鞄等の製作・販売
6	ひまわりの会	住民	2011年11月	仮設集会所	趣味	クラフト作品等の製作
7	シルバーテニスの会	住民	2011年11月	仮設集会所	趣味	クラフト作品の製作
8	田老さをり織り会	住民	2011年11月	被災地区・民家	趣味	さをり織り
9	田老２仮設自治会	住民	2011年11月	仮設団地	コミュニティ	
10	田老元気なまちづくりプロジェクト実行委員会（NGO）	住民	2011年12月	仮設団地	コミュニティ	地元新聞の発行、人材育成などの支援など
11	うましか	住民	2012年1月	仮設団地	コミュニティ	各団体との調整、パソコン教室や料理教室開催など
12	あみの会	住民	2012年4月	仮設集会所	趣味	PPバンドやクラフト作品の製作
13	田老地区復興まちづくり協議会	住民／支援者	2012年6月	仮設集会所（会議）	コミュニティ	復興まちづくりの検討・提言、イベント開催
14	テニスコート自由広場	住民	2012年9月	仮設集会所	趣味	体操
15	鯉のぼりの会	住民	2012年	仮設団地	コミュニティ	サケ幟販売、ふるさと学習会開催など
16	書道教室（グループ名はない）	住民	2013年2月	サポートセンター	趣味	ペン習字
17	海と森のサロン（さをりの会）	住民	2013年3月	たろちゃんハウス店舗	趣味	さをり織り
18	おらほの男の居場所	支援者	2013年7月	グリーンピア施設	コミュニティ	麻雀や将棋など場を提供
19	田老３仮設自治会	住民	2013年11月	仮設団地	コミュニティ	月数回の茶話会。呼びかけ（河北新報 14年6月付）
20	蕎麦グループ	住民	2014年6月	被災地区	コミュニティ	まちづくりとしての蕎麦栽培・販売
21	ひよこの会	住民	2014年11月	仮設集会所	趣味	クラフト作品の製作

「宮古社協が一番力を入れたといっても過言ではないのが、自治会の立ち上げの支援。仮設住宅住民が入居したころに、社協の役割や自治会の立ち上げなど説明会を夜を中心に市職員と開いていった。賛同する地区もあれば、仮の住まいなので要らないといわれた地区もあった。

小規模な仮設団地やリーダー的な人材がいない場合は、既存の自治会に入ることもあった。23年度、24年度で自治会が今のように立ち上がった。自治会が立ち上がらない仮設団地では、サロン活動やイベント開催などニーズのマッチングを含めた社協との連絡係を選出してもらった」

こうして、62か所の仮設団地のうち18か所で仮設自治会を立ち上げ、14か所が既存自治会に参加することになった。仮設自治会を立ち上げた18か所のうち、27年9月末時点で5か所が解散している。田老地区では、6か所の仮設団地のうち2か所で仮設自治会が形成された。田老2仮設自治会では、震災前、大平地区に居住していた住民が多く、大平地区自治会で副会長を務めていた男性が自治会長に選出された。田老3仮設自治会では、乙部地区に居住していた住民が多く、社協の理事長を務める地元有力者が自治会長に選出された。

【まちづくり関連団体】

震災後、復興まちづくりや地域活性化などに取り組むNPOやNGOなどの市民団体が発足した。こうした団体は、外部支援団体と連携しながら復興まちづくりやコミュニティ再生に関わるさまざまな取り組みを行っている。例えば、「NPO田老」は、震災・復興の記録や避難路の検討、観光マップの作成に至るまで行った。一方、まちづくりやコミュニティづくりの一環として、より具体的な取り組みに従事する団体もある。田老防浪（ぼうろう）堤夢灯り実行委員会／田老夢あかりを灯す実行委員会は、田老地区で長年夢明かりを製作している女性らによって結成され、補助金などの支援を得て、8月11日の花火大会開催に合わせて被災地区で夢明かりを灯す活動を行った。また、「蕎麦グループ」は被災地区で蕎麦の実栽培を行い、手打ちそばの販売を行っている。さらに、「鮭のぼりの会」は、こいのぼりのように田老で有名な鮭をかたどった鮭のぼりを空に泳がす取り組みを行っている。

表２　田老地区仮設団地

団地名	戸数	集会所／談話室	自治会
摂待仮設団地	7	×	×
田老１仮設団地	248	○	×
田老２仮設団地	37	○	○
田老３仮設団地	122	○	○
樫内１仮設団地	35	○	×
樫内２仮設団地	33	×	×

【趣味・自主サークル】

自主サークルの多くは、仮設団地で形成され、仮設集会所で活動した。そのほとんどは、女性たちが手しごとを行うグループである。これらのグループについては後述するので、ここでは、手しごと以外の他の自主サークルについて触れたい。「テニスコート自由広場」では、仮設団地で暮らす高齢者を対象に健康維持のため指導者を招いて体操を行っている。書道教室では、サポートセンターで仮設団地の男性住民が女性住民2人に書道を教えている。「おらほの男の居場所」は、支援団体によって運営され、男性たちの娯楽の場となった。

2　田老地区における手しごとサークル

震災後、筆者が現在把握している限りでは、これまでに田老地区で10グループが、女性のみのメンバーで構成され、手しごとを実践して

いる（表3）。本節では、田老地区における女性の手しごとサークルについて概観する。

【活動内容】

自主サークルの活動内容はさまざまなである。和布で手芸品を製作・販売している自主サークルやエコクラフトで籠や小物を制作している自主サークル、日本で1970年代に生まれた現代手織りのさをり織りを行う自主サークルもある。Gr1のように活動開始時には手芸を行っていたが、その後エコクラフトで籠造りも行うようになったりと、活動内容が複数ある場合もある。以下では、このような手しごとサークルが形成されるに至った経緯について概観する。

さをり織り：任意団体「ツナミクラフト」がさをり織りを通した心のケアや副収入づくりを目指した被災地支援が行われた。2011年10月に宮古市の自営業者や若者就労支援施設の協力を得て「三陸さをりプロジェクト」が開始され、第1回のさをり織り体験会が開催された。また、全国的なさをり織り組織も会員に被災地で支援できるボランティアの募集を呼びかけ、震災後に被災地支援に乗り出した。例えば、滝沢市のさをり織り工房「布糸灯園」は、2011年10月に当時津波で浸水したものの流出を免れた高齢者コミュニティセンターではじめてさをり織りの指導を行った。宮古市とその周辺だけで約10か所の自主サークルが形成された。

エコクラフト：エコクラフトによる籠作りや小物づくりを行う自主サークルは、田老仮設団地においてこれまで4つの自主サークルが形成された。当初、地元出身の支援者によって籠造りイベントが仮設集会所で開催された。その参加者によって自主サークルが形成されたり、そうした動きに刺激を受けて新たな活動としてエコクラフトによる籠造りを開始した自主サークルもある。

表3　田老地区における女性の手しごとサークル

Group	活動内容	参加者	活動時期	活動地域	活動場所	支援	販売
Gr1	エコクラフト、手芸	70歳代	2011年11月～	仮設団地	談話室	×	×
Gr2	エコクラフト	60～80歳代	2011年11月～	仮設団地	集会所	○	○(一部)
Gr3	裁縫	60歳代中心	2011年9月～	仮設団地	集会所→仮設商店	○	○
Gr4	さをり織り	60～70歳代	2011年11月～	被災地区	集会所→自宅	○	○(一部)
Gr5	ハンモック製作	50～70歳代	2012年1月～	仮設団地	各自宅	○	○
Gr6	エコクラフト、PPバンド籠作り	70～80歳代	2012年4月～2014年11月	仮設団地	集会所	○	×
Gr7	さをり織り	70歳代中心	2013年3月～	仮設団地	仮設商店	○	×
Gr8	エコクラフト	70～80歳代	2014年11月～	仮設団地	集会所	○	×
Gr9	手芸	70～80歳代	不明	仮設団地	集会所	×	×
Gr10	さをり織り	60～70歳代	2012年～	仮設団地	集会所	○	○(一部)

手芸：震災後、ボランティア団体の中には裁縫道具を携えて被災地支援に乗り出す団体もいた。例えば、京都の支援者はまだ避難所生活を送っていた頃から、はさみや針、布などを全国から集めて支援物資として届けた。また、避難所でエプロンや帽子、ティッシュケースなどを裁縫したり、スリッパを編んだりとさまざまなイベントがボランティアによって開催された。さらに、仮設住宅への入居後は、イベントに参加した人々が集会所に集まり、主体的に手芸を行うようになった。手芸を行う自主サークルは避難所生活での支援をきっかけとしながらも自然発生的に仮設集会所で形成された。

【活動地域・活動場所・活動時期】

Gr４を除いた９つの自主サークルは仮設団地内で活動している。その多くが仮設集会所での活動である。２０１１年５月、６月以降、避難所から仮設住宅へと入居しはじめた。支援者や仮設住宅入居者などさまざまな人々によって仮設団地内にある集会所が徐々に利用されはじめ、入居者のあいだで自然発生的に自主サークルが形成されたのが秋以降である。ただし、入居者の間では、仮設集会所で販売目的の製作活動は基本的には許可されていないと認識されていたため、販売品は各自宅で制作された。中には活動場所を仮設商店へと移転し、工房兼販売所を構えた自主サークルもある。

また、被災地区に形成されたGr４は、被災地区で浸水した集会所で活動していたが、復興工事で取り壊すことになり、現在ではメンバー宅の離れが活動場所となっている。この活動場所も浸水したが、震災後にリフォームを行い、「工房」として開放している。

【参加者】

集まりに参加する女性たちの多くは60才代から80才代の女性たちであり、70才代が参加メンバーの約半数を占める。そのため、就労している者は少なく、平日の日中に自主サークルの活動することが多い。

【支援者との関わり】

女性の自主サークルは、「支援」が契機となって活動が開始された場合が多い。しかし支援者と自主サークルとの関わり方はさまざまである。例えば、道具や材料を寄付する支援のかたちもあれば、実際に手しごとを指導する支援のかたちもある。また、商品開発や販売、品質チェックなどを支援者が行い、被災地の女性たちは製作過程のみを担う場合もある。また、コミュニティ支援を行う大学関係者（地元住民）が集会所予約や技術的な助言など〝見守り的〟支援の場合もある。さらに、外部から直接的な支援者がいない場合（Gr１やGr９）であっても、支援物資が送られてきたことで女性たちが集まって手しごとを行うきっかけにもなった。

3　なぜ手しごとなのか？

このように女性の手しごとの場は、「支援」が契機となって形成される傾向にある。では、そもそも支援者はなぜお針箱を携えながら被災地支援に乗り出すのだろうか。支援者側のイデオロギーとしてよく語られるのが、被災地における女性の経済的支援や雇用創出などである。例えば、「三陸にしごとを！プロジェクト」は漁網を利用してミサンガを製作・販売し、２０１３年12月のプロジェクト終了までに約１億２千万円もの収入を得た。田老地区においても、ハンモックの製作・販売を通して被災地支援を行う団体のホームページには「地元の方々に少しでも手しごとで生産販売を活性化してもらいたい、との思いで始まった取り組みです」とある。一方で、支援者の中には、経済的な要因だけではなく、人間の尊厳を取りもどすためのプロセスとして「縫う」ことや「編む」ことを位置づけ、被災地支援に取り組む人々もいる。Gr３の支援団体の代表は次のように語る。

「最初のころは、本当にそんな余裕はないけれども、支援のものがた

くさん来ると、体に合わないものもあるし、裾が長いとね、ガムテープで留めていたりとか。そういうのってみすぼらしい気持ちにもなるし。なんだろうな。（例えば、）実はお弁当には防腐剤がいっぱい入っているんですけど、ありがとうございますって、最初のころはうれしいんだけれども、やっぱり人間って、やっぱり自分の好きな素材で、好きな味付けで、できたら自分の気に入った食器で食べたいっていうのは（あると思います）。生きるのに必死で、何日間とか最初はそうじゃないですよ。（でも）そのうちにやっぱり、それがあって人間っていうところがありますよね。だから、やっぱり送られてきたものだけじゃなくて、何か取り戻していくことが必要で、それが縫うこともそうだというふうに、本当は思っているんですよ」

このように女性たちの手しごとの自主サークルが形成されるきっかけとなった支援にはさまざまなイデオロギーが混在している。このことは、被災地で手しごとをする女性たちについて、雇用の場の提供や経済的自立の支援だけではない文脈での理解も必要だといえる。では、なぜ被災した女性にとって手しごとすることが重要だったのだろうか。

【手しごとによる忘却と共有】

Gr2の結成の中心的な役割を果たしたAさんは次のように語る。

「震災後、やっぱり何か夢中になるものがないと、ただ引きこもっちゃうと大変というのがあった。集会所にみんなが出てくるようなものは何かなと思って、結局はたまたまこの手しごとに夢中になってしまった。家の中にばっかりいれるような状態ではない人たちが結構いたりとかで、自分自身もそうだったんですけど、やっぱり何かをすることによって忘れられる部分もあった。それで集会所に出て、みんなでやっていれば、笑ったりとか、少しでも忘れられるときもある」

また、さをり織りのボランティアとして田老地区へ２０１１年11月から田老地区で支援活動を行ってきたSさんは、はじめて田老地区でさをり織りを教えた時の様子を次のように語る。

「はじめて行って帰る時に、涙ぐんでる人がいて、私東京出身だから言葉がきついので、きついことを言ったかなと思ったら、（その人が）今日一日津波のことを思い出さなかったというの。夢中になっててね。それで私も逆に感激というか、びっくりしてね」

以上のような語りから、次の2つのことが言えよう。

第1に、手しごとをすることで、震災による悲しみや辛さを忘れられたということだ。確かに、手しごとによって津波の辛い体験を完全に忘れられるわけではない。ましてや家族を失った遺族にとって、震災から何年経とうと震災で負った傷は決して癒えるものではないだろう。しかし、さまざまな人が集会所に集い、一緒に手しごとをすることで、震災による辛い体験を一瞬でも忘れる時間ができたという。このような「忘却」の時間はつらい経験を抱える被災者にとって、涙してしまうほど、作品を仕上げることや作品の出来よりも重要なことであった。

第2に、手しごとの時間の笑いや楽しみを共有することの重要性である。Aさんが語るように、女性たちが集会所に集まり、夢中になって手しごとを行うことで、笑いと楽しみを共有できる場が生成される。単に黙々と作品づくりをするという時間の共有ではなく、女性たちが手しごとをする中で生まれる笑いや楽しみの共有が重要であったといえる。

【「お礼」としての手しごと】

Aさんによると、支援の「お礼」としてものづくりという要素もある。Aさんは以下のように語る。

「取っ手をつけるようなものの作り方を覚えてから、今度は震災のと

きにお世話になった人たちにお礼のつもりで作って、送ったりしている。ここ3年はほとんどが(お礼として)あげている。親戚とか身内とか、震災でお世話になったいろいろな方々にお礼として、お使いものとしてつくっていた。そのようなかたちで、手づくりで送るとやっぱり喜ばれて、お手紙が来たりすると、余計また喜んで（笑）」

このように、震災後個人的なつながりの中で受けた支援の「お礼」として自分たちが作った籠を送った。震災時、お見舞い金をいただくなどさまざまなかたちで支援してくれた人々に「お礼」としてものづくりは現在でも続く。例えば、支援者が開くチャリティコンサートにはお礼として約1千個ものキーホルダーを作り、来場者全員に配ったりする。

4　手しごと自主サークルと支援者とのかかわり

先述したように、手しごとを行う自主サークルのほとんどは、支援がきっかけとなって活動を開始した。支援者との関わり方は多様であることから、自主サークル結成の経緯も多様であるといえる。ここでは、グループ3を事例に、自主サークルと支援とのかかわりを述べる。

グループ3（以下Gr3）は、和布を使ったポーチやかばんなど着物や帯のリメイク商品を制作・販売している。では、どのような経緯でGr3は結成されたのだろうか。

田老地区では、震災直後の4月1日以降、9か所の避難所からグリーンピア三陸みやこ(以下GP)の1か所に避難所が集約され、大勢の人々が避難生活を共にすることになった。GP避難所には多くの支援者が入り、多くの物資が届けられた。このような中で、ある女性住民の仲介で、新里地区からTさんが避難所に針や裁ちはさみ、布などを支援物資として持ち、帽子や小物など裁縫・編み物のワークショップを開催していた。避難所には支援物資であるミシンや裁縫道具などが置かれたワークスペースが設置されていた。5月中旬以降、仮設団地が竣工し、被災者は仮設住宅へと移転しはじめた。すると、仮設団地に併設されている集会所や談話室では、多くの支援者がイベントなどを開催したり、仮設団地住民のさまざまな活動の場になっていった。こうして被災地に多くの人が支援に入る中で、仮設集会所において自然発生的にGr3が形成された。現在は、仮設商店街に制作場所と販売所を兼ね備えた「工房」を設けて活動している。

以上のような事から、Gr3の結成について、次の3点に焦点を当てて考えてみたい。第1に、支援者という「人」である。避難所にいる頃、支援者であるTさんが女性たちの活動のきっかけになった。彼女は避難所の一角や集会所において、裁縫や編み物のイベントを開催した。また、彼女は新たに京都の染色家であるYさんを連れてきた。メンバーたちは、全国からたくさんの支援してくれる人がきたけれども、自分たちはこの2人の支援者のおかげで活動していると語る。

第2に、支援物資という「モノ」である。支援者らは自らのブログやちらしなどで針やはさみ、布などの寄付を呼びかけ、全国からたくさんの支援物資を届けた。Gr3の女性たちは今でも支援物資として届いた道具を使い、「道具がなければこうした活動は何もできなかった」と道具の重要性を語る。

第3に、避難所でのワークスペースや仮設集会所という「場所」である。集会所や談話室の利用者は、とりわけ女性の利用者が多く、現在でも集会所は「女性が集まる場所」として認識されている。またGr3には大量に送られる布や衣服などの支援物資が届けられたことからも、活動場所としても物資の保管場所としても集会所は重要だった。

このように支援が被災地の女性たちの自主サークルの形成を促すことにつながった。しかしながら、すべての支援が女性たちの自主サークルの形成や彼女たちの実践を刺激することにはならないと考える。リーダーであるBさんは、支援者について、「先生がみんなが喜ぶような身近なもので支援に来てくれたので、たくさん人が飛びついていろんなことをしました」と語る。このことから、単なる支援ではなく、女性たちが「身近なもの」と感じる支援のあり方が息の長い女性の主

体的な実践を生むと考えられる。女性たちにとっての「身近な」ものとは、震災前からの日常的な営みにかかわるものである。例えば、Gr3には、和裁をしていた人や野染めをしていた人、手しごとに興味があった人などが集い、手しごとを実践している。また、Gr1のメンバーは、もともとレース編みや編み物が好きだった女性たちである。さらに、Gr5では、夫の漁網の修理などを手伝っていた女性たちが手馴れた様子でベビーハンモックを編んでいる。これまで日常的に手しごとをしていた女性は、震災によって新たなかたちで手しごとを実践している。震災前の女性たちにとって、手しごとという行為やモノなどがいかに身近であったかが、震災後に変容や差異を伴いながらも、彼女らを再び手しごとという実践へと誘ったと考えられる。

一方で、震災前まで手しごとをしていなかったという人もいる。Cさんは「こういうこと（手しごと）をやりたかったけど、やっていなかった」と語る。避難所での支援者による手しごとのワークショップに参加する過程で、彼女にとっての「日常」は、就労ではなく、憧れであった手しごとをする「日常」と変化した。また、Aさんは、震災後に支援者が来てさまざまな手しごとを体験する機会があったが、狭い仮設住宅で比較的場所を取らずに取り組めること、低コストで楽しめることなどの理由でエコクラフトによる籠造りをすることにしたと語る。このように女性たちは主体的に選択しながらこれまで経験したことのない長期的な仮設住宅での日常生活を営んできた。こうした手しごとを実践する女性たちの姿は、時に変容や差異を伴いながら、震災による日常性の変化に対して主体的な選択や決定を行った結果であると考えられる。

5　仮設集会所での実践

２０１１年5月から6月にかけて、被災した住民は、GPなどの避難所から仮設団地へと徐々に移動した。すると、仮設団地内での集会所が、ボランティアなどによるイベント開催や住民の会合の場になっていった。集会所は、多くの人々が集う場所となった。Gr3の女性たちは、当時のことを振り返り、「あの頃が一番楽しかった」「毎日のように集会所に通った」と語る。しかしながら、手しごとをする女性たちにとって、集会所の使用を巡って次の2つの問題が顕在化した。

第1に、集団間の境界性が明確化されることで、集団間に摩擦が生じるになった。先述したように、２０１１年秋以降、女性たちは「○○の会」というように団体名をつけ、集会所で活動するようになった。当時、仮設団地内にある集会所には、社協の生活支援員が常駐していた。集会所を利用するためには事前に予約が必要であるし、利用後は利用書に名前など明記しなければならない。こうした手続きは、高齢な利用者にとって時として面倒なものとなる。例えば、20人がメンバーであれば、集会所を利用する際には、すべてのメンバーの氏名を記入しなければならなかった。そこで、頻繁に集会所を利用する自主サークルには、社協スタッフから利用書の記入を簡潔にするため団体名をつけるようにと提案される場合もあったという。団体名をつけることで、団体名のみの記載で済むし、優先的に集会所が利用できるとの説明もあったという。

仮設集会所が利用しやすくなった一方で、グループ間の境界線が明確になったともいえる。例えば、当初、田老1仮設団地では、複数の「集まり」が仮設集会所を利用していた。しかも、いくつかの自主サークルが週のほとんどを活動日にあてて活動していた。しかし、仮設団地において集団で活動できる場所は仮設集会所に限られている。「場所」を確保できないということは、手しごとを実践する女性たちにとって致命的だったであろう。このような状況の中、集会所の利用を巡って女性たちは苦労しなければならなかった。それぞれの集まりが名称をつけ活動することで、集会所を巡ってグループ間で摩擦が生じた。例えば、ある人は、集会所を借りることに関わって他の自主サークルメンバーから「文句を言われたの」と語る。このように、複数の自主サークルが形成された仮設団地では、集会所を巡って女性たちの間で齟齬が生じたと考えられる。

第２に、集会所利用に関する暗黙のルールとして、販売目的のものづくりをしてはいけないという認識があった。例えば、Gr３では、２０１１年８月頃より仮設商店街でのテント販売や支援者を通してのネット販売を行っていた。しかし、仮設集会所で制作した作品は販売してはならないと社協スタッフから指摘を受けたこともあったという。集会所という公共性のある施設において、私的な利益を得る行為は許可できないとのことであろう。

一方で、自主サークルの女性たちのなかには他の被災者にも利益などを還元するような仕組みを構築していた。例えば、Gr３の場合、材料として使用する和布は着物の状態で来ることが多い。そうした着物を、彼女らは集会所に来ることができないような高齢者や縫うことができない高齢女性に解く作業を数百円で請け負ってもらっていた。このように、手しごとをする女性たちの実践は孤立しがちな仮設住宅の住民をも手しごとの場に巻き込むような仕組みを構築していたといえる。

おわりに

このように、女性たちによる手しごとの場は支援を契機に生成されたが、彼女たちの実践は支援を受けるだけの活動にはとどまらなかった。むしろ、女性たちの実践は他の住民をも巻き込むようなかたちで主体的な動きへと広がりを見せた。

しかしながら、このように実践する中で他の集団との間に葛藤や対立が生じることもある。例えば、仮設自治会というフォーマルな組織が立ち上がったことで、結果的にインフォーマルな組織による外の世界に広がる実践が自粛されることもあった。また、公共的な施設である集会所では、販売目的の商品は製作できないとの風潮が広がることで、女性たちの実践が困難に直面することもあった。しかし、このことを外からの介入が女性たちの主体的な実践の障壁になったという理解は適切ではないのかもしれない。このことは、外の世界がさまざまな立場や視点が存在する世界であることの表れである。女性たちの手しごとという実践は、地域社会、さらには被災地の外への認識が広がり、多様な関係性を構築する過程にあると考えられる。

【参考文献】（第２部）

(1)宮古市：宮古市震災復興基本方針　２０１１年６月
(2)宮古市：宮古市東日本大震災基本計画　２０１１年10月
(3)宮古市：宮古市東日本大震災推進計画　２０１２年３月
(4)宮古市：宮古市東日本大震災地区復興まちづくり計画　２０１２年３月
(5)岩手県：東日本大震災津波からの復興に向けた基本方針　２０１１年４月
(6)岩手県：岩手県東日本大震災津波復興計画　２０１１年８月
(7)岩手県：岩手県東日本大震災津波復興計画復興実施計画（第１期）２０１１年８月
(8)岩手県：社会資本の復旧・復興ロードマップ　２０１３年４月
(9)岩手県：津波伝承まちづくりガイドライン　２０１２年９月
(10)岩手県県土整備部都市計画課：ふるさと景観再生の手引き～岩手県沿岸地域復興に向けた景観形成の基本的考え方～　２０１２年９月
(11)南　正昭、添田文子、平井　寛、「壊滅的被災下における住民主体によるコミュニティ再生の支援に関する実践的研究」『土木学会論文集Ｆ５、ＶＯＬ.70、ＮＯ.２』、46～55頁　２０１４年
(12)佐藤悦子、南　正昭、添田文子「被災地で手しごとを実践する女たち―宮古市田老地区を事例に―」『日本災害復興学会論文集８』１～12頁　２０１６年

東日本大震災 宮古市の記録
第2巻（上）復興・防災編

平成二十九年（二〇一七）三月三十日　発行

編集　宮古市東日本大震災記録編集委員会
発行　宮古市
　　宮古市新川町二番一号
印刷　株式会社 文化印刷
　　宮古市松山五地割十三番地六